

〔研究ノート〕

永訣の朝

心象スケッチ『春と修羅』ノート（中）

Sentimental Journey

一九一八（大正七）年春、盛岡高等農林学校卒業後から一九二二（大正十）—二二（大正十一）年の冬、習作『冬のスケッチ』および『春と修羅』の冒頭の教篇を書くころまで、宮沢賢治は生涯中もともと「惨憺たる戦」をたたかっていた。

このたたかいは節目がふたつあるが、その節目ごとに宮沢賢治は生活実現の地歩を失い、ことばへと、へ虚の事業へとおしやられて行ったのである。

節目のひとつは家業の質・古着商をつぐことを拒み、「化学工業的な方面」の実業もしくは研究に従事し、自立し自活しようとしたことである。これは一九一八—一九年の冬には最終的に挫折する。当時妹トシの看病のため滞在していた東京から帰花し、ふたたび家の店番にすわる。「暗い生活」に逆もどりである。

……私の近状などはことさらお知らせするほどのことがないので

神子博昭

す。もしその時々感情をお便りするのでしたらこれもちかごろはすっかり鼠色の石の函の中へ蔵ひ込んでありますので、尤もこれをしまっても置かなかつたら本を一頁も読めないやうな環境のなかに私が居るのですから葉書さへ書く材料がないのです。その環境とはどう云ふ風のものか少しばかりおしらせしませうか。

古い布団綿、あかがついてひやりとする子供の着物、うすぐらい質物、凍ったのれん、青色のねたみ、乾燥な計算、その他。

（一九二〇年二月ごろ、保阪嘉内あて）

いまひとつの節目は日蓮主義の仏教団体、国柱会に入会（一九二〇年夏か秋）、その信行部ではたらこうと家出同然に上京する（一九二一年一月）ことである。浄土真宗の生家のなかで、宮沢賢治は信仰において明確に自立し、法華経の実践をとおして生活の体をなそうと絶望的な努力をする。しかし国柱会のなかでも実践の明瞭な意味は見つけられなかったようである。また父をも母をも、親友保阪嘉内をも帰正（改宗）させられず、彼は行きつまる。

七月の始め頃から二十五日頃へかけて一寸肉食をしたのです。それは第一は私の感情があまり冬のやうな工合になってしまつて燃えるやうな生理的の衝動なんか感じないやうに思はれたので、こんな事では一人の心をも理解し兼ねると思つて断然幾片かの豚の脂、塩鱈の干物などを食べた為にそれをきつかけにして脚が悪くなつたのです。

(一九二二年八月十一日、関徳彌あて)

肉を食うことが彼にとりどんな意味をもつか、わかるものは、ここで彼がどのような状態におちいつているか容易に推察できよう。彼の心は「冬のやう」に、すきみきつている。

この直後、妹トシの病気の知らせをうけて帰花したとき、宮沢賢治は「実」の事業において万策つきていたのである。仕事をとおして自立するのめかなわず、信仰により生活に形を与えることもできず、ふたたび家にもどつた彼は父にたいし母にたいし、なにもものでもなかつた。

この時期、妹トシの看病をしながら、彼はなにをもとめていただろうか？ 信心か？ 信仰の実践か？ それとも宇宙の生命とひとつになつることだろうか？ —— 結局は自分でもわからなかつたのだと思ふ。信心でもなく、実践でもなく、生命の感情でもない。そのどれでもなく、しかしある意味ではそのどれでもありうる。—— ここに「詩」へと向う根拠があるのだ。ともかくも衝動だけはあつた、リズムという形で。いまだ書かれざる詩篇をまえに、これが彼のもつすべてであつた。

屈折率

七つ森のこつちのひとつが
水の中よりもつと明るく
そしてたいへん巨きいのに
わたくしはでこぼこ凍つたみちをふみ
このでこぼこの雪をふみ
向ふの縮れた亜鉛の雲へ

陰気な郵便脚夫のやうに

(またアラツディン洋燈とり)

急がなければならぬのか

ななつ	もりの	こつちの	ひとつが
みづのな	かより	もつとあ	かるく
そしてた	いへん	おほきい	のに
わたくしは	でこぼこ	ごぼつた	みちをふみ
	このでこ	ぼこの	ゆきをふみ
むかふの	ちちれた	あえんの	くもへ
いんきな	いうびん	きやくふの	やうに
	(またア	ラツディン	ラムブ
	とり)		
いそがな	ければ	ならない	のか

(譜 1)

心象スケッチ『春と修羅』巻頭の詩篇である。リズムを示せばつぎのとおり（譜1）。

さいしよの詩が「屈折率」と題されているのは偶然だろうか？ 大気から水中へ光がはいるとき屈折するように、詩のなかの「自然」はいわば屈折した光のもとにあらわれる風景なのだ。「水の中よりもつと明るく／そしてたいへん巨きいのに」——この情動をこめた表現は屈折面を示している。それは「自然」と「わたくし」が同致すべき場面（幻想—フィクション）をさしているのである。

リズムのうえからいえば、さいしよのアクセントは一行目第三小節の促音（「こつちの」）にくる。次行の同じ箇所では促音はもういちどくりかえされ（「もつと」）、この緊張は三行目やはり同じ箇所の長音（「おほきい」）にたくわえられる。そしてひとつの転回点をむかえる。「わたくしは——」この休止のなかで詩全体がくるりと転位する。「自然」のなかから「わたくし」ははじきだされる。

「自然」と「わたくし」（意識）を同致させようとする仮構は逆に、両者が同致しえないことを明かさざるをえない。こうして詩は矛盾したうごぎの舞台となる。詩のことばは「自然」と「わたくし」が同致すべき場面をさし示しながら、その場面のただなかにおいて「わたくし」は「自然」からはじきだされ、二度くりかえされる「でこぼこ」の道をふみ、単調な2／4拍子、四小節の詩行をたどって「急がなければならぬ」のである。

野はらのはてはシベリアの天末^ま

土耳其玉製玲瓏のつぎ目も光り

（お日さまは

そらの遠くで白い火を
どしどしお焚きなさいます）

笹の雪が
燃え落ちる 燃え落ちる

（『丘の眩惑』）

さいごの二行はエクスタシイを示しているよう。「自然」と「わたくし」の同致こそ、宮沢賢治の「無垢」の可能性の証しであり、またその実現なのである。だがそれがあくまでも詩における仮構であることを、つぎの一篇が示してくれる。

コバルト山地

コバルト山地^{さんち}の氷霧^{ひようむ}のなかで
あやしい朝の火が燃えてあます
毛無森^{けなしのもり}のきり跡あたりの見当^{けんたう}です
たしかにせいしんてきの白い火が
水より強くどしどしどし燃えてあます

「燃えてあます」という話体は当然ながらきき手の存在をふくみこんで成立している。はなし手ときき手という枠組を前提として、だれかが「朝の火」のことをつたえているのである。だが、つたえているのだろうか？

——いっぴきの兎が自然の風景をそのまま舞台にしてこの場面に

びよんびよんとんできて、お陽さまの白い火に陶然と見入っていた。しばらくしてくるりとふりむき、他の動物に不思議な火のことをおしえてやった。——そんな仮構線がわたしには思いうかぶのである。

ぬすびと

青じろい骸骨星座のよあけがた

凍えた泥の乱反射をわたり

店さきにひとつ置かれた

堤婆のかめをぬすんだもの

にはかにもその長く黒い脚をやめ

二つの耳に二つの手をあて

電線のオルゴールを聴く

ここでは〈無垢〉なるもののかげに身をかくし、息をひそめて「ぬすびと」をやりすごそうとしている。「ぬすびと」は「長く黒い脚」をした蜘蛛である。と蜘蛛はたちどまり電線のオルゴールに耳をすます。——蜘蛛が「提婆（三世）ころのインドの僧アーリヤデーヴァのことか）のかめ」をぬすむか？ ぬすむわけがない。ただそのような場面を想像のなかによびこむように、詩は書かれているのである。

この詩には、信仰をめぐっての父子の対立のなかで、いつも一歩おくれたところを歩くしかない（と思われた）自分を「ぬすびと」のよううしろめたくも、はがゆくも思っていた宮沢賢治の自己感受がこめられているかもしれない。しかしそれこそしのび足で歩く蜘蛛の姿である。そして蜘蛛をじっとやりすごすものの位置も、同じところま

で低くなる。無垢なる視線を仮構するとき、それはどうしても人間ではなく、小動物や昆虫の視線を生じさせてしまうのだ。人間はむしろ〈修羅〉となる。

春と修羅

(mental sketch modified)

心象のはいろいろはがねから

あけびのつるはくもにからまり

のぼらのやぶや腐植の湿地

いちめんのいちめんの詔曲模様

(正午の管楽よりもしく)

琥珀のかけらがそそぐとき)

いかりのながまた青さ

四月の気層のひかりの底を

唾し はぎしりゆききする

おれはひとり修羅なのだ

(風景はなみだにゆすれ)

碎ける雲の眼路をかぎり

れいらうの天の海には

聖玻璃の風が行き交ひ

ZYPRESSEN 春のいちれつ

くろぐろと光素を吸ひ

その暗い脚並からは

天山の雪の稜さへひかるのに

(かげらふの波と白い偏光)

まことのことばはうしなはれ

雲はちぎれてそらをとぶ

ああかがやきの四月の底を

はぎしり燃えてゆきぎする

おれはひとりの修羅なのだ

(玉髓の雲がながれて

どこで啼くその春の鳥)

日輪青くかげろへば

修羅は樹林に交響し

陥りくらむ天の椀から

黒い木の群落が延び

その枝はかなしくしげり

すべては二重の風景を

喪神の森の梢から

ひらめいてとびたつからす

(気層いよいよすみわたり

ひのきもしんと天に立つころ)

草地の黄金をすぎてくるもの

ことなくひとのかたちのもの

けらをまとひおれを見るその農夫

ほんたうにおれが見えるのか

まばゆい気圏の海のそこに

(かなしみは青々ふかく)

ZYPRESSEN しじかにゆすれ

鳥はまた青ぞらを截る

(まことのことばはここになく

修羅のなみだはつちにふる)

あたらしくそらに息つけば

ほの白く肺はちぢまり

(このからだそのみちにちらばれ)

いちふのこずえまたひかり

ZYPRESSEN いよいよ黒く

雲の火ばなは降りそそぐ

これは倨傲にもにた、おそろしく満々たる自信をひめたマニフェストである。

国柱会での活動に挫折して帰花して以来、宮沢賢治は〈実〉の世界においては、なにもでもなかった。彼はいわくいいがたいものを〈虚〉の世界にもとめて行く。それが〈自然〉と〈わたくし〉の同致であった。この仮構を〈人間〉でささえてくれるものとすれば、それは妹へとし子しかなかった。妹との関係においてのみ、つまり親もなく繫累もなく、また性の側面からあとうかぎりはなれた双子という仮構(イメージ)をとおしてのみ、彼には〈無垢〉の可能性がひらかれていたのである。他の人間に向きあえば、彼は無でしかない。「無職、無宿、ならずもの、ごろつき、さぎし、ねぢけもの、うそつき、かたり、ごまのはひ」(一九一九年秋、保阪嘉内あて)でしかないのである。しかしこの「なにものでもない」男は、〈実〉の世界ではどこにも無垢の可能性がひらかれないのを知っている〈無〉なのである。こうして

彼はおのれが〈寒〉の世界における否定性を一身にあつめ、それを〈寒〉の世界になげかえず存在であることを宣言する。おれはひとりの修羅なのだ、それならおまえらはなにものか？ この詩はそういどんでいるにひとしい。

「心象のはいいろはがねから／あけびのつるはくもにからまり」——
 このころのイメージは灰色の鋼できてきている。あるいは鋼のような質感である。そのイメージからあけびのつるがのび、雲にまでからまり、やぶや湿地ではのびらや草がうねりくねって、ふたたび心をとりにしてしまふ。これも〈自然〉と〈わたくし〉の同致ではある。しかし「せいしんてきの白い火」に見入る兎のエクスタシィはここにはない。むしろ対極である。〈わたくし〉の邪悪さに〈自然〉が同致し、自ら邪悪となり〈わたくし〉をとりこんでしまふ。

一方、「れいらうの天の海」「聖^{せい}玻璃^{はり}の風」「光^{エリテ}素^カ」「天山の雪の稜」「玉髓の雲」——これらのことばは〈自然〉のいまひとつの様態、つまり同致可能性をさしている。〈自然〉が邪悪と聖性の両極に疎外されてしまっているのだ。「すべて二重の風景を」——「おれ」は〈自然〉のまっただなかにいて、〈自然〉から放りだされている。なぜか？

無垢であろうとすれば無垢なる小動物を仮構せざるをえないものが、あるとき人間としてたとうとした。人間とは意識^二反自然である。この仮定（フィクション）を認めようとしなければ、自然からはみでた位相（意識）はどこまでも「まことのことば」の失われた状態として断罪され、他方「まことのことば」は到達不可能な彼方へとおしやられるしかない。「おれ」はここではなく、あそこへ行きたいのだが、行きつけないのを知っている。そこでただ「はぎしりゆききする」ほかない。このうっ屈がやわらかな草や、からみあったやぶをふみつぶ

し、ふみたおして行くような2／4拍子、四小節の怒りのリズムを駆りたてている。

この怒りはあらゆるところに、あらゆるものに虚偽をかぎつける。2／4拍子、歩行のリズムは義をいたてる行進のリズムとなる。それはだんが、い、する。しかし一方、「このからだそらのみぢんにちらばれ」という詩行にうかがえるのは、自己否定の願望である。「おれ」はあそこに行きつけないならば、むしろ自己の存在を否定して〈自然〉のなかにまぎれこみ、それと一体化したいのだ。このいまにもだんが、いの不毛さに行きつこうとする他者否定と、〈自然〉との一体化を可能にする自己否定との狭間をきわどくぬって、修羅の怒りのリズムはつづけられる。

この詩はひとつのマニフェストである。そこにこの作品のいどむがごとくの性格と、またきわどさがある。草地をすぐてくる農夫に「ほんたうにおれが見えるのか」と問う「おれ」について、つぎのようにいうのは菅谷規矩雄である（『宮沢賢治序説』）。

この反語は、同時に、「おれ」が「農夫」のほんたうの姿や心を「見る」ことをも拒絶していることにひとしい。おのれを「修羅」だと断言しうる自負と自持は、たぶん、そうであるかぎり他者の〈内心〉の修羅にたいして眼をとじることを必然とした。

ここにこの詩の、たえず回転していなければついにたおれてしまふ、コマまたようなあやうさがある。

しかし宮沢賢治は、なぜ人間としてたとうとしたのだろうか？ このところわたしは「ほかのひと」との恋愛をおいてみたいのだ。

無垢なる視線を可能にしようとするれば、どうしても人間のレベルからはすべりおち、無垢なる生きものの視線を仮構せざるをえなかった。妹へとし子との関係における双子という形でのみ、かろうじて人間のレベルはふみこたえたのであった。この情況にあつては恋愛はひとつの危機である。恋愛は宮沢賢治に人間であるのに耐えることを要求する。と同時に、彼にはそれが不可能であることをあからさまにしもするからである。このかつとうから「ひとり生きて行く」ことをえらびとり、それをおのれに納得するまでいきかせようとするのが長篇『小岩井農場』の最奥のモチーフとなる。

小岩井行とはなんであるか？ひとまづそれを、センチメンタル・ジャーニーという性格でおさえておく。

この詩の構成はかなり奇妙なものである。場面設定は小岩井農場の停車場から、農場の耕耘部までの春の道のりをへわたくしへが往き帰りする、というものである。へわたくしへはこの冬に、ここを訪れている。冬から春へとうつりかわった農場の景観が、回想と幻想による屈折をうけながら、スケッチされている。全体は九つのパートにわかれているが、草稿段階ではあったパート五と六とがそっくり削られ「パート五 パート六」という題字だけのこり、パート八はまったく欠けている。パート七から、いきなりパート九になっているのだ。どうしてこうなるのか、よくわからない。わたしの論にひきよせていえば、小岩井行を書きおえてはじめて、この長篇のモチーフに気づいたのだ。だから草稿からスケッチ集のテキストへの圧縮は、モチーフを鮮明にする編集作業ということになる。いづれにしてもこの論の文脈で問題となるのはパート一、四、九であり、それはまたこの長篇全体のほと

りの芯をひめたパートである。

わたくしはずあぶんすばやく汽車からおりた
そのために雲がぎらつとひかつたくらゐだ

長篇冒頭の二行である。へわたくしへは自分でも思いがけぬほど気負って汽車からとびおりる。この気負いは逆に、自分が突出してしまふのではないかという、かすかなおそれを目ざめさせる。

へわたくしへは単独で停車場から農場へ向って歩むことにはためらいをおぼえる。なにかがへわたくしへをひきとめて、自分ひとりで自分に向きあうことを躊躇させる。へわたくしへはいっしょにおりた乗客のひとりにひきよせられる、「化学の並川さんによく肖たひとだ」。駅前に馬車が一台とまっている。「このひと」はそれにのる。「わたくしへにも乗れといへばいい／馭者がよこから呼べばいい」「今日ならわたくしだって／馬車に乗れないわけではない」——このためらいはひそかな傷の存在を暗示しているだろう。

だが馬車はうごきだす。「うしろからはもうたれも来ない」。汽車からおりた他のひとたちも、いつのまにか西にまがって見えなくなった。「いまわたくしは歩測のときのやう／しんかい地ふうのたてものは／みんなうしろに片附けた」——へわたくしへはひとり。たったひとり、小岩井の野に向きあう。

冬にきたときはまるでべつだ

みんなすつかり変つてゐる

変つたとはいへそれは雪が往き

雲が展^びけてつちが呼吸し

幹や芽のなかに燐光や樹液^{じゆえき}がながれ

あをじろい春になつただけだ

それよりもこんなせわしい心象の明滅をつらね

すみやかなすみやかな万法^{ばんぽう}流^{りゅう}転^{てん}のなかに

小岩井のきれいな野はらや牧場の標本が

いかにも確かに継^つ起^きするといふことが

どんなに新鮮な奇蹟^{きせき}だらう

へわたくしは野の変りようにおどろかさされる。それはへわたくし

の孤独をうつ。しかしただ変つたということに目をうばわれているば

かりではない。「いかにも確かに継^つ起^きする」——あの同じ小岩井の野が

このようにも変るのだ。冬の思いにとられていゝへわたくしは心の

なかでもなにかが溶ける。あるいはそのきざしが生まれる。

たしかに冬の記憶がやきついて、はなれない。心はいくどもそこに

もどつてくる。パート四では冬の思い出と現在の情景とが交替する。

冬にはこゝの凍つた池で

こどもらがひどくわらつた

(から松はとびいろのすてきな脚です)

向ふにひかるのは雲でせうか粉雪でせうか

それとも野はらの雪に日が照つていゝのでせうか

氷滑りをやりながらなにがそんなにおかしいのです

おまへさんたちの頬つべたはまつ赤ですよ)

葱^{ねぎ}いろの春の水に

楊^{ペム}の花芽^{ハベロ}ももうぼやける……

(中略)

耕耘部へはここから行くのがちかい

ふゆのあひだだつて雪がかたまり

馬^ば轡^{せり}も通つていつたほどだ

(ゆきがかたくなかつたやうだ)

なぜならそりはゆきをあげた

たしかに酵母のちんでんを

冴^さえた氣流に吹きあげた)

あのときはきらきらする雪の移動のなかを

ひとはあぶなつかしいセレナーデを口笛に吹き

往つたりきたりなんべんしたかわからない

(四列の茶いろな落葉松)

けれどもあの調子はづれのセレナーデが

風やときどきばつとたつ雪と

どんなによくつりあつてゐたことか

それは雪の日のアイスクリームとおなし

(もつともそれなら暖炉^{だんろ}もまつ赤^かだらうし

muscovieも少しそつぽに灼^やけるだらうし

おれたちには見^みられないぜい沢^{たく}だ)

春のヴァンダイクブラウン

きれいにはたけは耕耘^{くわん}された

雲はけふも白金^{はくきん}と白金^{はくきん}黒^{こく}

そのまばゆい明暗ひかりのなかで
ひばりはしきりに啼ないてゐる

冬のあのとき、こどもらは笑い声をあげ、だれか(草稿では「おれ」となっていた)が口笛で調子はずれのセレナーデを吹いていた。笑い声や口笛が奇妙に感覚をひくのだ。そしてその感受のし方がいまも尾をひき、記憶にまとりついてはなれない。このまとりつきかたはどこかエロチックですらある。それは冬の「わたくし」がこどもの笑い声やまっ赤なほっぺ、調子はずれの口笛に、おさえようとしていたエロスをひきだされているからである。

ここでセンチメンタル・ジャーニーとよぶものは、失恋したものがかつて恋人と旅した土地をいまいちどひとりたずねてみる、そうした場面設定をふくむものだ。だから小岩井行はげんみつにはセンチメンタル・ジャーニーではない。「わたくし」は冬のときもひとりだった。しかし冬の「わたくし」は恋情にまといつかれていた。笑い声や口笛にどうしようもなくからみとられてしまう感受性のありようは、そのことを暗示している。だから春の小岩井行は、いまだあとをひくこの恋情にたいしどのように内心の決着をつけるかというモチーフをいちばん底にひめていたのである。

それらかがやく氷片の懸吊けんてうをふみ
青らむ天のうつろのなかへ
かたなのやうにつきすすみ
すべて水いろの哀愁あいきうを焚たき
さびしい反照はんさうの偏光へんかうを載のせ

いま日を横ぎる黒雲は
侏羅じゅうらや白堊びやくわうのまつくらな森林のなか
爬虫はちゆうがけはしく歯を鳴らして飛ぶ

その氾濫の水けむりからのぼったのだ
たれも見えてゐないその地質時代の林の底を
水は濁つてどんどんながれた
いまこそおれはさびしくない
たつたひとりで生きて行く
こんなさまなたましひと
たれがいつしよに行けやうか
大びらにまつすぐに進んで
それでいけないといふのなら
田舎ふうのダブルカラなど引き裂いてしまへ
それからさきがあんまり青黒くなつてきたら……
そんなさきまでかんがへないでいい
ちからいつばい口笛を吹け

決着はパート四の半ばすぎ、まことにとうとうとつにやってくる。「それらかがやく氷片の……」以下「すべて水いろの哀愁を焚き／さびしい反照の偏光を載れ」までの述志風のリズムは、それまでの文脈からすればとつぜんの転調ではあるが理解できないわけではない。「わたくし」はここでまといつく冬の記憶をたちきりたいのだ。だがつぎの原始林の幻想はなんだろう？　ここは肝心なところであるような気はする。なんといつてもこのイメージを媒介にして、「いまこそおれはさびしくない／たつたひとりで生きて行く」という、この長篇全体にとつ

て決定的な決意がうまれてきているのだから。ところがその肝心なところが、どうもうまくつかめない。原始林のイメージが「へわたくし」の孤独にふれるのだろうか？ いちばんのかなめの部分は、「たれも見てゐない」林の底を水はにこってどんどん流れた、というところにある。そんな気はする。「へわたくし」も「ほかのひと」も、いやそもそも人間はだれひとりいない風景、しかもそれを見ている目だけはある——これは孤独のきわみのイメージだろうか？ その絶対の孤独から見たとき、「へわたくし」の孤独は相対化される、とでもいうのだろうか？ だからこそ「こんなままなたましひと／たれがいつしよに行けやうか」という俗謡風のリズムへの変化がおこるのか？ なぜならここには軽い自嘲がこめられているのだから。——さんねんながら、よくわからない。宮沢賢治自身にも、この決着はうまく意識化できていなかったと思われる。たぶん。あらためて、もういちどおのれの決着に向きあうひつようがあるのである。

しかしともかくもこの決意の直後に、「小さな胸を張り」「ほのぼのとかがやいてわらふ」すあしのこどもらの幻視があらわれる。このこどもらは頼ったをまっ赤にして「ひどくわらつた」冬のこどもらとはちがって天からきて、無垢なるものの象徴である。

最終パート九の場面は耕耘部からの帰り道、さきほどのパート四と同じ場所できりひろげられる。ふりだした雨のなか、「へわたくし」はまた不思議な幻想を見る。「遠いともたち」ユリアとベムベルというふたりの童話的な形姿が「へわたくし」の左右を、「巨きなまっつ白なすあし」を見せて歩くのである。パート四のこどもらの幻視同様、このユリアとベムベルも無垢なるものの象徴である。「たつたひとりで生きて行く」という決意が、無垢のイメージをよびよせているのである。こ

れがユリア、ベムベルの幻想のひとつの淵源だ。

しかし奇妙なことに「へわたくし」のうちには、この幻想にしつようにさからう声がある。(幻想が向ふから追つてくるときは／もうにんげんの壊れるときだ) (あんまりひどい幻想だ) ——

このパートはなかなか錯綜して、容易には解きほぐしがたい。「へわたくし」はまといつく愛情をたちきって、「ひとり生きて行」こうと決意した。それならばユリア、ベムベルという無垢なるものの象徴は、その決意をむしろささえてくれるのではあるまいか？

わたくしはなにをびくびくしてゐるのだ

どうしてもどうしてもさびしくてたまらないときは

ひとはみんなきつと斯ういふことになる

きみたちとけふあふことができたので

わたくしはこの巨きな旅のなかの一つづりから

血みどろになつて逃げなくてもいいのです

ユリアとベムベルが「へわたくし」をすくってくれんとすれば、内心のあらがう声にはなにか理由があるのだろうか？ この幻想はもうひとつ別の淵源をもつにちがいない。

パート四ですあしのこどもらと出会った場所に「へわたくし」はもういちどたっている。

さうです 農場のこのへんは

まったく不思議におもはれます

どうしてかわたくしはこころを

der heilige Punkt と

呼びたいやうな気がします

この冬だつて耕耘部まで用事で来て

ここいらの句のいゝふぶぎのなかで

なにとはなしに聖いところもちがして

凍えさうになりながらいつまでもいつまでも

いつたり来たりしてゐました

さつきもさうです

どこの子どもらですかあの環路をつけた子は

これは恋情にまといつかれていたのとはまたちがった冬のへわたくし^しの姿をうかびあがらせている。なんとはなしに聖い思いを抱きながら、ふぶぎのなか、凍えるのもかまわずに行ったり来たりする姿とはなんだろう？ わたしはこれは、ひそかな死の願望であると思う。冬の小岩井行は一方でおさえようとしていたエロスをいいあてると同時に、それをうちけそうとする無意識の自死願望をうかびあがらせもしたのだ。そしていま、もういちど、形をかえてあらわれた自死願望と向きあっている。つまりユリア、ペムペルのいまひとつの淵源とは^死の領域なのである。^{無垢}なるものに帰りつくには^死をくぐりぬけなければならぬ、ユリアとペムペルの巨きなまっ白なすあしが無言のうちにつきつけてくるものはそれであった。ところがへわたくし^しはともかくも生きて行くことをえらびとった。ユリアとペムペルの幻想から、ぜがひでも身をひきはなさなければならぬのである。

ひとり、生きて行く、というエロスの断念が無垢なるもののイメー

ジをよびよせた。同時に、ひとり、生きて行く、という生の意志はこのイメージの淵源にある死に留保を附さざるをえない。この矛盾したうごきのなかにユリア、ペムペルの幻想はうかびあがり、しりぞけられて行くのである。こうして長篇はさいごの核心にいたる。ここは他人に向けたマニフェストである詩篇『春と修羅』とは異なり、宮沢賢治がへ人間であるぎりぎりのところでおのれに向けて語った、スケッチ集中もつともはげしく真にせまった箇所である。

雨のなかでひばりが鳴いてゐるのです

あなたがたは赤い瑪瑙の棘でいつばいな野はらも

その貝殻のやうに白くひかり

底の平らな巨きなすあしにふむむのでせう

もう決定した そつちへ行くな

これらはみんなただしくない

いま疲れてかたちを更へたおまへの信仰から

発散して酸えたひかりの激だ

ちいさな自分を割ることのできない

この不可思議な大きな心象宇宙のなかで

もしも正しいねがひに燃えて

じぶんひとと万象といつしよに

至上福しにいたらうとする

それがある宗教情操とするならば

そのねがひから砕けまたは疲れ

じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと

完全そして永久にどこまでもいつしよに行かうとする

この変態を恋愛といふ

そしてどこまでもその方向では

決して求め得られないその恋愛の本質的な部分を

むりにもごまかし求め得やうとする

この傾向を性慾といふ

すべてこれら漸移のなかのさまざまな過程に従つて

さまざまな眼に見えまた見えない生物の種類がある

この命題は可逆的にもまた正しく

わたくしにはあんまり恐ろしいことだ

けれどもいくら恐ろしいといつても

それがほんたうならしかたない

さあはつきり眼をあいてたれにも見え

明確に物理学の法則にしたがふ

これら実在の現象のなから

あたらしくまつすぐに起て

明るい雨がこんなにたのしくそそぐのに

馬車が行く 馬はぬれて黒い

ひとはくるまに立つて行く

もうけつしてさびしくはない

なんべんさびしくないと云つたところで

またさびしくなるのはきまつてゐる

けれどもここはこれでいいのだ

すべてさびしさと悲傷とを焚いて

ひとは透明な軌道をすすむ

ラリックス ラリックス いよいよ青く

雲はますます縮れてひかり

わたくしはかつきりみちをまがる

一一

エロスの実現は断念されたが、「生物」のエロスそのものは否定されず、むしろ宗教情操——恋愛——性慾というヒエラルヒーに位置づけられ、うけいれられている。独特なのは、その情動のヒエラルヒーに対応して「生物」の序列があるということである。さらにこうもいわれる、「この命題は可逆的にもまた正しく」——これはなにをいつているのだろうか？「この命題」とは、「すべてこれら漸移のなかのさまざまな過程に従つて／さまざまな眼に見えまた見えない生物の種類がある」をさすものだろう。さまざまな過程があれば、それに応じてかならず、さまざまな生物がいる。であれば「可逆的にも正しい」とは、生物にさまざまな種類が設定できれば、それはかならず対応したさまざまな過程に従っている、ということになるだろうか。情動のヒエラルヒーと生物の序列との一対一の対応をいつているように読める。そしてそれが「心象宇宙」の秩序ということになるだろうか。——では「わたくし」はどこに位置するだろうか？それはここでは、はっきりとはいわれていない。ある種の可能性をまえに、おそれてはいる、「わたくしにはあんまり恐ろしいことだ」。しかしおそれは、ひと、または「わたくし」が生物のどの種類に属するか、どの序列に位置するか、いまだ決っていないことを意味しもある。可能性はまだ開かれているのだ。

ここで「わたくし」は性慾の情動、また情動一般のヒエラルヒーをうけいれている。ひとは（そして「わたくし」は）宗教情操を抱いていたいと思ひながらも容易に性慾にまでおちて行くものだ、しかしそれはそれでいいのだ、という具合に。このヒエラルヒーをくだって行

けば〈修羅〉のイメージがうかびでるだろうし、逆に上昇して行けばまっ白なすあしの〈こども〉のイメージがえられるだろう。だが〈修羅〉でもあり同時に〈こども〉でもありうるところに〈人間〉というカテゴリーは成立するのである。ひとは崇高な宗教情操を抱きながらも容易に性慾に駆りたてられるし、性慾にとらわれながらも熱烈な宗教情操を実現することだってあるのだ。この幅のひろがりと内包における多層性、逆転、錯雑をそっくりそのままひきうけるしか、なにもはじまりようがない。だが宮沢賢治はそこまではいかない。へわたくしはなんべんでもこのヒエラルヒーをくだっては性慾におちて行くだろう、しかしそれはそれでいいのだ、そううけいれはする。しかし階層性そのものはゆるがない。性慾はあくまでもおちた状態なのである。それは情動の自然性として認められているだけなのだ。これが彼としてはぎりぎりのところであった。

どうして、こうなるか？ それは彼が関係を拒んでいるからである。宗教情操といい恋愛といい、性慾といってもそこには関係の概念が核心にひめられている。性慾や恋愛とはエロスをなかだちにして他人と関係を結ぶことである。「じぶんとひとと万象といつしよに／至上福しにいたらうとする」宗教情操は必然的に倫理的な関係をよびこむだろう。ところが宮沢賢治はこの関係にはいるのを拒む——「たつたひとりで生きて行く」というふうに。宗教情操——恋愛——性慾という、関係概念をふくみこんだ心のうごぎのヒエラルヒーを彼は全体として是認する。しかし彼自身この関係を結ぶ場面からは身をしりぞける。これは矛盾である。心のうごぎは対象を失い、たんなる心のうごぎとしてその自然性を認められて行くばかりである。宗教情操にみちびかれてはいりこんだ関係がどんな地獄の様相を呈しうるか、あるい

♪ | ♪ ♪ ♪ ♪ | ♪ ♪ ♪ ♪ | ♪ ♪ | ♪ ♪ ♪ ♪ | ♪ ♪ ♪ ♪ |
ラ リッ クス ラリッ クス いよいよ あをく

♪ | ♪ ♪ ♪ ♪ | ♪ ♪ ♪ ♪ | ♪ ♪ ♪ ♪ | ♪ ♪ ♪ ♪ |
くもは ますます ちおれて ひかり

♪ | ♪ ♪ ♪ ♪ | ♪ ♪ ♪ ♪ | ♪ ♪ ♪ ♪ | ♪ ♪ ♪ ♪ |
わ たくしは かっ きり みちを まがる

(譜 2)

は性慾をなかだちに結んだ関係のなかにいかなる真が具現しうるか、こうした弁証法にはいりこむのを宮沢賢治は回避する。

だがこれがぎりぎりのところで無垢への通路をまもりぬく彼の決意であった。さいごの三行のリズムには、ともかくも危機をぬけきったという自負がある(譜2)。

だがこの自負がどれほどあやういかは、こう問うてみればすぐわかる。いつまで彼は生きて行くつもりか？——妹の死まで、ことばにならぬ彼の決意の内奥がこたえたとすれば、そうなる。これはわたくしのまったくの憶測だが、ひとり生きて行くと宮沢賢治が決意したとき、同時に、妹の死とともに自分にも死がおとすれると不条理にも、

2/4

しかし彼自身にとってはこのうえもないほど自然にも思いこんだのではあるまいか。しかしこれはまた自ら危機を、しかも最大の危機をよびこんだにひとしい。

(つづく)